

特集 複製版

社会的に大きな影響をもつた戦後の複製版第一号は、「福開大百科」(平凡社)だ。昭和二六年に、第一巻が複製されてゐる。だが、今日、流布されてゐる、いわゆる複製版の草分けは、株式会社明治出版の「明治前期産業発出資料」といふものだ。昭和三四年である。いま、いわゆる複製版は六つだが、これは、古書の高価な複製資料を、写真で複写してフセットで印刷、主として古書の販売ルートで安く販売するといふ出版形式のことだ。

明治出版社長・藤原正氏は「なまなま」で、

「なまなま」の資料の散佚をせざるが目的です。ポイント、近代日本の経緯期・明治初年のこと、産業史を志しました。「明治前期産業発出資料」は、はじめ全二〇集のものだったのですが、今までの二一五〇冊出すことになりました。

これで、日本資本主義の発達過程を辿ることが出来るわけですが、他方、日本資本主義の発達が生み出した社会主義、これも掘りさげていきたいと考え、昭和三五年には、明治社会主義史料として、「平民新聞」とか「直言」「火輪」などの雑誌、荒畑寒村の「谷中村械闘」、松岡荒村「荒村遺稿」などを複製してきまして」

藤原氏は、もともと古書店の出身、明治の文献には精通している。今では、印刷所をもつまことに「複製版長」をこなしている。

「複製版がどれほど安いかわいうことですが、『盛出出版算報』告書」のこのあたり、東大でこの原本を百数十万円か買つたのです。私もものが複製したものとは時期がちがつてゐると思ひますが、複製版は七万円足らずで買えます。一般読者は、必ずしも安くない値段ですが、原本からみれば、それでも何百分の一です。これで、学問の機会均等という私たちの願ひに、回帰が近づいてゐるにちがひありません」

複製版が、学問の機会均等に貢献してゐるのは疑ひもない事実

学問の機会均等

今日は批判的歓迎ムード

で、これを入手が困難だった「吾妻鏡」が名著刊行会から複製されること、たちまち在庫が底をつくという有様だ。という、明治の「群書類展」といわれる「明治文庫」(全三十三巻、日本評論社)も、すでに若い巻は重版を要する好調さが、それを裏付けてゐる。

古書の需要がことごと高くなり、いわば煮詰められた需要をもつてゐる原本だから、複製版が好調なのも当然といえるだろう。複製版のピンチを挙げるとすれば、『日本書影協会叢書』(東京大学出版会)、『大日本史料』(同)、

『大日本古史書』(同)、『古事類聚』(吉川弘文館)、それに『明治文化全集』(日本評論社)といふことにならう。「群書類展」(総群書類展完成会)は、戦前のものの再刊だから、別格ということだが、これもみな、好調な売行きが伝えられ、また講談社の「説書備要」は二万五千部、「天字典」が八万部と大規模の出版といわれてゐるし、『文学界』(日本近代文学研究所)、『新聞集成明治編年史』(盛岡堂)なども良かったという。

複製版は、たかにチームといふのもつと二、三読者を考える必要があるのではないだろうか。一つのは、評論家の紀田順一郎氏、同氏は、こうもいふ。

複製版展望

・改訂をしているが、これまでの複製版はじつは複製版だった。新しい需要をつくりだすためには、もっと積極的に組みかゝるための編集をする

必要があるといふこと。この方法なら、古書館が高くないものでも、新しい需要を創造できると思ひますが、こうなると、一社の複製版出版社の手に負えるものではなかりません。

「複製版は出してゐるだけで、あがたい」といふ人が多い。こうした賛成派にたいして、「改訂も増補もせずに、解説もつけず複製(複製)した」といふ嘆きを訴える人もある。紀田氏は、この風折した状況を、「批判的歓迎ムード」と呼んでゐるが、たしかに、なを出しても売れる、安易な時代はなくなりつつあるようだ。

複製される資料は、限られた範囲を対象にした地味な研究者用文庫が大部分であるため、新刊取次